

男性的趣味の形成と変容

——戦前／戦中／戦後の『子供の科学』の内容分析から工作趣味、鉄道趣味を考える——

辻
塩谷 昌之
泉
之

目次

1. 本論文の目的および概要
2. なぜ今、工作趣味、鉄道趣味を考えるのか
3. 分析対象と方法
4. 戦前／戦中／戦後の『子供の科学』の概要
5. 「工作記事」の分析
6. まとめ

1. 本論文の目的および概要

今日の日本社会において、特に男性を中心とするファン層に支えられた、趣味的な活動の代表例として、工作趣味が挙げられよう。そこで作られるものは、実に様々だが、特に複雑な機械類、中でも乗り物類は高い人気を誇っている。

そして日本社会の男性たちに根強い人気を誇る鉄道趣味においても、車両や建物などを工作する鉄道模型は、代表的なジャンルとして知られている。もともと実物の鉄道が存在せず、科学技術を外国から輸入しながら、後発的に近代化を遂げてきたこの社会においては、むしろそのジャンルこそが、鉄道趣味の原点と指摘されることもある(辻2008, 2014など)。

しかしながら、こうした工作や模型といった男性的な趣味がどのように形成され、変容を遂げてきたのか、いまだに十分に解明されてきたとは言えないだろう。よって本論文では、これらの趣味が勃興する1920年代以降の科学雑誌(『子供の科学』)を主たる対象としながら、いかなる背景を

もってそれが勃興し、さらにその後どのような変容を辿りながら、今日のような状況に至ったのか、明らかにしていくことを目的としたい。その際、松井広志(2017)の時代区分を参照し、「戦前(～1930(昭和5)年)」、「戦中(1931～1945(昭和6～20)年)」、「戦後(1946～1960(昭和21～35)年)」に分けながら傾向を見ていくこととしたい。

だが、十分な先行研究の存在しないテーマである以上、その実態を問題発見的に掘り下げていくような記述のスタイルをとりたい。またその際には、広く全般的に「工作」を、さらに時に「鉄道」に注目しながら、分析を展開していきたい。

なお本論文の構成および留意すべき点を先に述べておくと、続く2節では、なぜ工作趣味、鉄道趣味に注目するのかという点について、関連する主要な先行研究をレビューし、さらに3節で資料の収集や分析の方法について論じる。その上で各論として、4節では、この期間の『子供の科学』における表紙や記事内容の概略を記し、5節で工作趣味の変容に特化した分析を展開し、最後の6節で全体的にまとめていくこととする。なお、本論文は共著論文であるため、節・項ごとに、末尾にその著者名を記すこととする。

(辻 泉)

2. なぜ今、工作趣味、鉄道趣味を考えるのか

2.1. 「作ること」はなぜ重要か

次に、なぜ今、工作趣味、鉄道趣味について考

える必要があるのかを述べていきたい。端的に言えば、第一には、その歴史を追うことが、この社会の特徴的な一面を描き出すのに役立つということ、第二には、それが失われたり、大きな変容を遂げつつある現在だからこそ、あえてとらえなおすべきタイミングにあるのではないか、ということである。

第一点について触れておくならば、同じように自作あるいは手作りをする趣味であっても、どちらかといえば「手芸」が、主として女性たちが担うものと考えられてきたのに対して、「工作」は、主として男性たちが担うものと考えられてきた。

前者が家庭内の装飾品などを作り、後者が機械類や乗り物などを作ることからすれば、やや乱暴な二分法かもしれないが、女性の「手芸」はいわゆる私的な領域と、そして男性の「工作」は公的な領域と関わろうとするふるまいであったともいえる。よってそこからは、この社会に特徴的なジェンダーのありようを浮かび上がらせることが期待できよう。

この点について、女性の手芸が、いくつかの代表的な研究によって探求されてきたのと比べると（代表的なものとして、山崎 2005 など）、男性の工作は驚くほど手つかずのままであるといわざるをえない。もちろん男性たちの工作趣味の実態についても、当時を知る者たちによる詳細な回顧録的なものは複数存在し（串間 1997、柏木・小森 2007 など）、これらは資料的価値も高く参考になるのだが、さらに社会的に、あるいはジェンダー論的な視点から、実証的な分析手法も用いて、明らかにしていくことが求められよう。

次に第二点について、今日がこうした自作あるいは手作りの趣味の失われつつある、ないしは大きく変容しつつある時代という点について、考えてみよう。

たとえば、レイ・カーツワイルは、その著書『ポスト・ヒューマン誕生』（2007）において、2045年頃には、人工知能が人間を上回る「シンギュラ

リティ（技術的特異点）」が訪れると予測している。すでにオートメーション化の進みつつある現代社会で、さらに人工知能が人間を上回れば、人間は自ら思考し、ものを作り出す必要が全くなくなっていくであろう。現在のように、工作が生活の手段や生業ではなく、余暇の趣味となるだけにとどまらず、文字通り何もしなくてよい社会がすぐそこまで迫ろうとしているのである。付け加えれば、その結果、現在では当たり前のように存在している多数の職業が不要なものとなり、失業者が急増するのではないかと予測されている。

だが、そうした人工知能を含めて、もともとは人間が作り出してきたものである。そのように人間は、これまでににおいて、ものを作り出すとともに、この社会をも作り出してきた。そしてまたそうしたふるまいが、自らの存在をも作り出してきたと指摘するのが、リチャード・セネットである。

彼は、著書『クラフツマン』（Sennett 2008 = 2016）の中で、「作ること」とは、ものを、社会を、そして自分を作ることであり、人間が社会、あるいは公共的なものと関わるために必要な行為なのだ論じている。彼が事例として取り上げているのは、まさに手作りを代表するような、いわゆる職人たち（クラフツマン）であり、彼らに見られるようなふるまいを「クラフツマンシップ（職人的技能）」と呼んで肯定的にとらえなおしている。

セネットの議論の骨子は、『クラフツマン』の邦訳書のサブタイトルにある、「作ることは考えることである」というフレーズに要約されていよう。あるいは、彼の師にあたるハンナ・アーレントの議論と対比するとクリアーだが、アーレントは、『人間の条件』（Arendt, 1958 = 1994）の中で、職人的技能の上位に、抽象的な思考を位置づけ、社会や公共性について討議＝熟議することの重要性を説いていた。だが対照的にセネットは、両者をどちらも重要なものとしてとらえようとするのである。

セネット流に言えば、「シンギュラリティ（技

術的特異点)も間近に迫った今日は、もはや「クラフツマン」も、そして「クラフツマンシップ」さえ消え失せようとしている社会であり、さらに直截に言えば、人間が人間ではなくなってしまう社会ということになる(先述のカーツワイルの著書のタイトル『ポストヒューマン』にも、そのような意味が込められているとあってよいだろう)。

そしてだからこそ、今、「作ること」をあらためて問い直すことが重要なのではないだろうか。「作ること」は「考えること(討議=熟議)」と同等に、人間が社会、あるいは公共性と関わる行為であり、あるいは場合によっては、さらにより直接的な行為であり、だからこそ、「作ること」は、ものだけでなく、社会を、そして自分を作ることとして重要なのである。

別ないい方をすれば、このオートメーション化が進んだ時代に、なぜそれでも「作ること」に惹かれる人々が存在しているのか、という問いに対して、次のようにも答えられるだろう。すなわち、男性の工作にせよ、女性の手芸にせよ、ステレオタイプ的には単なる趣味として、いわば暇つぶしや余暇活動、浪費行動にすぎないものとして、時に否定的にとらえられがちだが、それはむしろ我々の存在そのものと深く関わった、一つの根源的なふるまいだからなのである、と。

2.2. 「作ること」とジェンダー

自作や手作りといった「作ること」が、単なる余暇や趣味ではなく、我々の存在と深く関わった、根源的なふるまいであることは、「作ること」がジェンダーによって構造化されていること、具体例を挙げれば、男性の工作と女性の手芸が、別のものとして営まれてきたことから窺い知れよう。すなわち、近代社会における性別役割分業とは、大きくいえば、男性を公的領域の労働に、女性を私的領域の家事や育児へと向かわせてきたものといえる。それゆえに、男性の工作は、機械や乗り物であったりと、より公的な領域と関わるも

のを作り、女性の手芸は、家庭内の装飾品など、より私的な領域と関わるものを作ってきたのである。端的に、学校の科目名でなぞらえるならば、工作と家庭科の歴史の対比ともいえるだろう。

だが、こうした二分法は一見自明なようでいてそうではない。たとえば、こうした科目は、同時並行的に発達してきたのではなく、実は、手芸や家庭科に当たるもののほうが先で、工作があとから登場した。より正確に述べれば、今日におけるいわゆる教科としての家庭と図画工作は、いずれも1947(昭和22)年の新教育制度の発足とともに成立したものであるが、1872(明治5)年には、すでに小学校女子向けに「手芸」という科目が存在しており、その内容は、裁縫や行儀作法といった、まさに日常生活に密着した実践的なものであったといわれている。

一方で工作の歴史について、森下一期(1986)によれば、当初かなり不安定な科目としてみなされながらも、おおむねその原点は、1880年代に設置された手工科にさかのぼることができるという。しかしながら当時の手工は、農業や商業とならんだ職業教育のための科目であり、この点では手芸と同じように、身近なものを作り出すような、日常生活と結びついた実践的な位置づけにあったという。それが大きな転機を迎えるのは、第一に、大正期から、日常生活と密接な身近なものを作り出すというよりも、理科との結びつきを強めて、科学的な思考を育てる場として注目されるようになったこと、あるいは第二に、戦時中に至り、科学は強調されつつも、軍艦や模型飛行機といった軍事色の強いものを作るようになったことであるという。

いわば、日本社会の近代化、すなわち富国強兵、殖産興業といった工業化、軍事化の進展とともに、当初、ごく身近なものを作るものであった「手工」が、徐々に科学的な「工作」へと姿を変えてきたのである。

そしてまた、こうした工業化、軍事化といった

社会の近代化過程は、「男らしい」文化の成立過程とパラレルでもあった。この点については、例えばジョージ・モッセが、『ナショナリズムとセクシュアリティ』(Mosse 1988=1996)や『男のイメージ—男性性の創造と近代社会』(Mosse 1996=2005)などの著作で重要な議論を展開している。すなわち、「男らしさの理想を普及させたものは、最終的には近代社会そのものにほかならない」(Mosse 1996=2005:13)と指摘した上で、「近代的な男性性は、社会の現実と未来への希望を共に反映している一連の諸特性から構成されていた。…(中略)…男性性は、社会の理想と希望の象徴を供給している。」(ibid:26)と述べ、ナショナリスティックでロマンチックな欲望を色濃くもったものとして、「男らしい」文化を分析している。

日本においても、そうしたナショナリスティックでロマンチックな「男らしい」文化の実態や歴史については、いくつかの研究が進められてきた。たとえば、阿部恒久・大日方純夫・天野正子らによる『男性史』のシリーズであったり(阿部恒久・大日方純夫・天野正子編, 2006a, 2006b, 2006c), 『「男らしさ」のゆくえ—男性文化の文化社会学』に代表される伊藤公雄の著作(伊藤 1993, 1996, 2004)が挙げられよう。

あるいはこれらとも関連して、より年少の男性、すなわち少年文化の実態や歴史についても、いくつかの研究が進められてきたが、その特性を明らかにする上で、もっぱら対象とされてきたのは、佐藤(1959=1993)や、二上(1978)、山中・山本(1985)、西(1997)などに代表されるように、いわゆる「少年小説」であった。あるいはそれが多く掲載されたメディアとして、『少年倶楽部』に代表されるような「少年雑誌」が主たる研究対象となってきた(たとえば、岩橋 1988, 今田 2007, 内田 2010 など)。

こうした少年小説研究の成果の一つとして、少年たちの文化の源流を、ある少年雑誌の創刊に見

ようとしたのが、木村直恵による『青年の誕生』(木村 1998)である。木村は、同書の中で、以下のように述べ、日本社会で本格的な近代化の始まった明治中期(1880年代)にその源流が見出せると指摘した。この時期は、先に述べた「手工」が科目として登場し始めたころと重なるが、さらに日本初の少年雑誌である『少年園』が創刊された時期でもあったのである。

このような契機をもたらしたのが、明治二十一年十一月三日の天長節に、少年園という名の出版社から創刊された雑誌『少年園』だった。…(中略)…いま現在、われわれがなぜ少年雑誌にはきまって理科とスポーツと読み物となぞなぞが掲載されているのかと考えるとき、われわれはそれが『少年園』において初めて組み合わせられたものであると知るだろう。近代日本はこの『少年園』において初めて、「少年」、すなわち「青年」と混同されることのない「少年」を知ることになるのであり、このような独自性をもった「少年」をめぐる問題系は、ここで設定されたものにほかならないのである。」(木村 1998:282-3)

『少年園』が対象としたのは、高等小学校から中学生くらいまで、大体十歳から十七歳くらいまでである」(ibid 1998:284)

『少年園』の成功を見て、この後年を追うごとに博文館をはじめとする大小の出版社が同様の雑誌を発行し始め、後に「少年雑誌」と呼ばれることになるジャンルを形成していくことになる(ibid 1998:285)

繰り返せば、いわば『少年園』が創刊された明治中期とは、日本社会における近代化が本格化し始め、国家としての輪郭がおぼろげに見え始めて

いた時期だったといえ、それは「少年は日本男児の予備軍として「明るく正しく強く」、少女は「良妻賢母」の予備軍として「清く正しく美しく」、という〈理想〉を目指すべき」（宮台・大塚・石原 1992・1993=2007:27）存在として、少年文化と少女文化がそれぞれに芽生え始めていた時期でもあった。そして先取りすれば、森下が工作の第一の転機として挙げていた大正時代に、今日でも刊行の続く、代表的な科学雑誌として『子供の科学』が刊行されることになる。

さて、こうした文学的な研究が重要であることは言を俟たないが、その一方で、工作趣味の歴史については、一部の例外を除いて、十分に掘り下げられてこなかったといつてよい。分析対象でいえば、『少年園』や『少年倶楽部』はしばしば取り上げられてきたが、『子供の科学』を本格的に、社会的あるいはジェンダー論的に取り上げた研究は多くなかった。

数少ない例外として、辻(2008, 2009, 2014)は、鉄道趣味の歴史をメインフォーカスとしながら、それが大正や昭和初期における科学雑誌の工作趣味から派生し、戦時中に軍事色が強まると同時に一定の発展を遂げたことが、今日の日本社会の男性たちにおいて、大きな規模を持つ趣味に至った背景であったと指摘した。また、この研究でさらに重要なのは、それゆえ鉄道趣味が戦前においては、現在ほど大規模なものではなく、むしろ戦艦や戦闘機といったミリタリーなものの方が、少年たちの関心の多くを集めていたのではないかということ、そして戦前における鉄道に対する関心も、こうしたミリタリーな関心の勃興とともに高まったのだが、それが敗戦によって軍が消滅したことで、鉄道があくまで結果的に注目されたのではないかと示唆したことである。この点は本論文においても、実証的なデータから検討する価値がある。

ほかにも、工作をメインターゲットにしたわけではないが、高橋(2011)は、日本におけるラジ

オの歴史を紐解きながら、その中でラジオ工作文化の形成過程を述べているし、また松井(2017)は、工作によってつくられる模型のメディア性に着目し、それがいかに少年や男性たちの、ナショナルスティックでロマンティックな欲望を媒介してきたかを論じている。さらに松井の議論で重要なのは、こうした歴史的な形成過程を追う上で、先述の辻の議論もそうであったように、どうしても日本社会では、「戦前／戦後」といった二項対立図式を用いやすいのだが、そこに「戦中」という時期を挿入し、「戦前／戦中／戦後」という三段階の区分から、より詳細な記述ができることを示した点である。

このように、男性の趣味や文化の歴史を紐解こうとした研究は決して多くはないし、ましてや工作趣味に着目した研究となると、なおさら数は限られてしまう。しかしながら、上記してきたように、「作ること」の意味が問い直され、それが根源的なふるまひのひとつとして注目されている今日、あらためて、その形成や変容の過程を追うことには重要な意義があろう。

本論文でその全てを語りつくせるわけではないが、以降では、そうした研究に少しでも役立つための、基礎的なデータの提供や、実態把握のための一歩となるような考察を展開していくこととしたい。

(辻 泉)

3. 分析対象と方法

3.1. 分析対象

本論文が分析対象とするのは、『子供の科学』(誠文堂新光社)の、創刊時から1960年にまでいたる、入手可能な限りの全ての号である。『子供の科学』は、知られるように1924(大正13)年に、現在の誠文堂新光社の前身にあたる子供の科学社から、原田三夫を中心にして、刊行された雑誌である。まさに日本を代表する科学雑誌であるとともに、今日でも刊行が続けられており、その点でも、

歴史的な経緯を追う上では、最適の分析対象といえるだろう。

なお、詳細は別稿に譲るが、『子供の科学』には、『学生の科学』『小学生の科学』といった関連の雑誌が存在し、それらとの合併などもあったのは事実だが、ここでは、1つの雑誌タイトル内における通時的な分析に重点を置くこととした。

図1 『子供の科学』1924（大正13）年10月号（創刊号）の表紙（北海道立図書館所蔵）



後述するように、本論文では、その各号の表紙および各記事に関する内容分析を行う。また収集時期については、「戦前／戦中／戦後」という三段階の対比を明確にするために、創刊された1924（大正13）年から1960（昭和35）年までを対象とし、このうち1924（大正13）年～1930（昭和5）年までを「戦前」、満州事変の起こった1931（昭和6）年～1945（昭和20）年までを「戦

中」、1946（昭和21）年～1960（昭和35）年までを「戦後」として区分した。月刊誌であるので、刊行された号数はおおむね一年当たり12号だが、年次によっては、多少の増減があり、増刊的な位置づけの号が発行された場合や、創刊された年、あるいは敗戦時の1945（昭和20）年などは発行数が少なく、また資料収集の都合上、特に附録の欠損が多く、どうしても収集できなかった記事なども一部あったが、全体では419号分を対象とすることとした。なおそのうち、「戦前」が74号分、「戦中」が169号分、「戦後」が176号分となる。

3.2. 分析方法

分析においては、オーソドックスな内容分析の手法を用い、コード表を用いて、必要な事項の有無などをカウントした。ただしカウントにおいては、客観性を担保するために、最終的に複数のコーダーでチェックし検討を行った。

なお分析の単位は、各号の表紙と記事である。記事については、各号の目次やそのタイトルなどを参照し、独立した内容として把握しうるものをひとつの記事として分析対象とした。対象とした記事の総数は、15,250件である。

次に分析に用いたコードについて触れておこう。本論文の目的は、工作趣味の形成および変容過程を追うことにあるが、まずは表紙や各記事の基本的なメディア特性に関する項目をカウントした。具体的には、表紙については「表現形式（写真が主か、イラストが主か、など）」についてであり、記事については「記事形式（扉絵か、グラビアか、読者関連ページか、付録か、その他の一般的な記事か）」、「内容（工作記事か、実験観察記事か、小説か、地誌か、特定人物の記事か、読み物か）」、「(扱った) 国や地域（日本か、欧米か、アジアか、その他か、明示なしか）」、「書き手（軍人（海軍）か、軍人（陸軍）か、軍人（その他）か、科学者・研究者・教員・技術者（それぞれ民間を含む）か、その他か、不明か）」、「書き手の性別（男

性か、女性か、その他・不明か)」などである。

その上で、特に重要な項目として、「戦前」や「戦中」における軍事的な影響がどれだけあったのかを明らかにするために、独立した項目として、表紙と記事の両方について、「軍事関係の要素」の有無をカウントした。そしてさらに、『子供の科学』が何を扱ってきたのか、ひいては、その熱心な読者であった少年たちが、何に関心を向けてきたのかを明らかにするために、表紙および記事に共通して、登場するヒトやものについても、複数回答形式でカウントを行った。

項目の詳細は以下の表1にあるとおりだが、登場するヒトやものについては、主として、「ヒト(人)や生き物関連」(1. 少年／2. 少女／3. 軍人(男性)／4. 科学者(男性)／5. その他の成人男性(およそ20歳以上)／6. 成人女性(およそ20歳以上)／7. 虫(昆虫など)／8. その他の動物(魚類、爬虫類、哺乳類など)／9. 植物)、「機械類や乗り物関連」(10. 軍艦／11. その他の船舶／12. 戦闘機／13. その他の飛行機／14. 戦車／15. その他の自動車／16. 鉄道／17. そのほかの乗り物／18. ラジオ・無線機／19. テレビ／20. そのほかの機械類)、「科学・理科関連」(21. 実験器具、工作器具など／22. 薬品類、医療・衛生関係(細菌含む)など／23. 天体／24. 岩石類(宝石含む)、とそれ以外(25. その他)である。またこれらとは独立して、工作趣味に注目するという観点から、別途「26. 模型」の登場の有無についてもカウントした。

なお、年代との関連をとらえるためにクロス表分析を行うが、分析結果については統計的検定を行い、表中の有意水準の表記方法は、「*** = 0.1%水準で有意 ($\alpha < .001$)、** = 1%水準で有意 ($\alpha < .01$)、* = 5%水準で有意 ($\alpha < .05$)、※ = 10%水準で有意 ($\alpha < .100$)」とし、統計的検定にあたっては、場合によってカテゴリーを統合するなどの工夫を適宜行ったということを付記しておきたい。

表1 表紙用・記事用分析コード表

・軍事関係の要素(共通)
ある／ない
・表現形式(表紙のみ)
写真(が主)／イラスト(が主)／合成(写真とイラストが半々)／その他
・記事形式(記事のみ)
扉絵／グラビア／読者関連ページ／付録／(その他一般の記事)
・内容(記事のみ)
工作記事／実験観察記事／小説／地誌／特定人物の記事／読み物／その他
・国、地域(記事のみ)
日本／欧米／アジア／その他／(明示なし)
・書き手(記事のみ)
軍人(海軍)／軍人(陸軍)／軍人(その他)／科学者・研究者・教員・技術者(それぞれ民間を含む)／その他／不明
・書き手の性別(記事のみ)
男性／女性／その他・不明
・登場するヒト、もの(MA・共通)
1. 少年／2. 少女／3. 軍人(男性)／4. 科学者(男性)／5. その他の成人男性(およそ20歳以上)／6. 成人女性(およそ20歳以上)
7. 虫(昆虫など)／8. その他の動物(魚類、爬虫類、哺乳類など)／9. 植物
10. 軍艦／11. その他の船舶
12. 戦闘機／13. その他の飛行機
14. 戦車／15. その他の自動車
16. 鉄道／17. そのほかの乗り物
18. ラジオ・無線機／19. テレビ
20. そのほかの機械類
21. 実験器具、工作器具など／22. 薬品類、医療・衛生関係(細菌含む)など
23. 天体／24. 岩石類(宝石含む)
25. その他
26. 模型

(辻 泉)

4. 戦前／戦中／戦後の『子供の科学』の概要

4.1. 『子供の科学』の表紙の概要

では、結果の検討に入ろう。まずは表紙からだが、全部で419号分の表紙を分析対象とした。そのうち、「戦前」74号分、「戦中」169号分、「戦後」176号分がそれぞれ対象であり、各年代の代表的な表紙を、本項の末尾に図示しておいたので参照してほしい。

表2は、表紙の分析結果をまとめたものであるが、まず「表現形式」についてみると、「イラスト

表2 表紙の内容分析結果

(表現形式、テーマ、登場するヒト、もの、n=419)

表現形式	件数	%
写真 (が主)	120	28.6
イラスト (が主)	294	70.2
合成 (写真とイラストが半々)	3	0.7
その他	2	0.5
軍事関係の要素	件数	%
ない	330	78.8
ある	89	21.2
登場するヒト、もの (ランキング)	件数	%
<u>(12 + 13. 全ての飛行機)</u>	106	25.3
<u>(10 + 11. 全ての船舶)</u>	82	19.6
5. その他の成人男性 (およそ 20 歳以上)	67	16.0
13. その他の飛行機	59	14.1
1. 少年	58	13.8
11. その他の船舶	54	12.9
12. 戦闘機	51	12.2
20. そのほかの機械類	50	11.9
3. 軍人 (男性)	50	11.9
8. その他の動物 (魚類, 爬虫類, 哺乳類など)	50	11.9
26. 模型	41	9.8
23. 天体	36	8.6
<u>(14 + 15. 全ての車)</u>	33	7.9
10. 軍艦	33	7.9
16. 鉄道	33	7.9
15. その他の自動車	26	6.2
9. 植物	21	5.0
7. 虫 (昆虫など)	17	4.1
17. そのほかの乗り物	15	3.6
2. 少女	13	3.1
21. 実験器具, 工作器具など	9	2.1
18. ラジオ・無線機	8	1.9
14. 戦車	7	1.7
6. 成人女性 (およそ 20 歳以上)	7	1.7
19. テレビ	5	1.2
4. 科学者 (男性)	5	1.2
24. 岩石類 (宝石含む)	4	1.0
22. 薬品類, 医療・衛生関係 (細菌含む) など	0	0.0
25. その他	37	8.8

ト (が主)」が最も多く 70.2% を占め、「写真 (が主)」の 28.6% を大きく上回っている。またテーマに踏み込んで、「軍事関係の要素」の有無を見ると、「ある」は 21.2% と限られているが、これらの傾向は、後述するように、年代によって大きく変わってくるものである。

そして登場するヒト、ものについては、ランキング形式で順位をつけ、さらに「10. 軍艦 / 11. その他の船舶」については、「(10 + 11. 全ての船舶)」に、「12. 戦闘機 / 13. その他の飛行機」については、「(12 + 13. 全ての飛行機)」に、「14. 戦車 / 15. その他の自動車」は「(14 + 15. 全ての車)」にそれぞれ合算し、合算以前、以後の項目ともに、参考までに両方とも表中に記しておいた。

その結果、1位が「(12 + 13. 全ての飛行機)」25.3%、2位が「(10 + 11. 全ての船舶)」19.6% となり、やはり乗り物が多く登場することがあらためて明らかになった。さらに多いものとしては、3位に「5. その他の成人男性 (およそ 20 歳以上)」16.0% や、5位「1. 少年」13.8%、9位に「3. 軍人 (男性)」11.9% など、やはり男性が多く登場することが窺え、『子供の科学』と銘打ってはいえるものの、基本的に男性や、特に少年をターゲットとしたものであったことが、こうしたデータからもあらためて窺えた。やはり中心を占めていたのは、乗り物に代表される機械類と、少年たちだったのである。

だが一方で、興味深い発見もある。今日において、飛行機や船舶と比べても、鉄道趣味が大規模であることからすれば、「16. 鉄道」が 14位で 7.9% であり、今日の日本の基幹産業であるにもかかわらず「14 + 15. 全ての車」も同じく 14位で 7.9% なのは、やや少なく感じられよう。この点は、先行研究が示していたように、当時の少年たちにとっては、戦闘機や軍艦と比べると、鉄道は、どちらといえば地味な存在であったことを裏付けているように思われるが、年代別に見ると、その傾向がさらに明らかになるだろう。

次に表紙の年代別の傾向だが、表3の「表現形式」から見ると、「写真(が主)」であるものは、「戦前」「戦中」にはほぼ存在せず、ほとんどが「戦後」であることがわかり、それと逆に、「戦前」「戦中」はほぼ「イラスト(が主)」であったことがわかる。これは、単に印刷技術の進歩ととらえることも可能だが、「戦前」や「戦中」においては、ナショナルリスティックでロマンチックな欲望を掻き立てるためには、リアルな写真を掲載するよりも、フィクショナルなイラストを用いたほうが、より効果的であったともいえるのではないだろうか。

表4の「軍事関係の要素」について見ると、「ある」の割合が、「戦中」において、45.6%と高くなるのは当然としても、「戦前」は2.7%と低く、むしろ「戦後」の5.7%を下回っているという点

も興味深い。やはり、「戦前／戦後」の二項対立よりは、「戦前／戦中／戦後」という対比の方が、変化がクリアーになるように思われる。

そして、登場するヒト、ものについて、先ほど同様に全体で登場する割合についてのランキング形式に並べ替えた上で、年代ごとの登場割合を示したのが表5である。

いくつか興味深い点が窺えるが、まずランキングの1位にあった「(12 + 13. 全ての飛行機)」において、「戦前」18.9%→「戦中」42.6%→「戦後」11.4%と、戦中が最も多くなっており、2位の「(10 + 11. 全ての船舶)」も同様の増減傾向にある。さらに、「3. 軍人(男性)」の増減傾向も同じであり、これらは、やはり戦時中の高揚と結びついたパターンとして理解できるだろう。

表3 表紙の内容分析結果 (表現形式と年代のクロス表, n=419) ***

			年代			合計
			戦前 (1924 ~ 1930)	戦中 (1931 ~ 1945)	戦後 (1946 ~ 1960)	
表現形式	写真(が主)	件数	0	1	119	120
		%	0.0%	0.6%	67.6%	28.6%
	イラスト(が主)	件数	74	166	54	294
		%	100.0%	98.2%	30.7%	70.2%
	合成(写真とイラストが半々)	件数	0	0	3	3
		%	0.0%	0.0%	1.7%	0.7%
	その他	件数	0	2	0	2
		%	0.0%	1.2%	0.0%	0.5%
合計		件数	74	169	176	419
		%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

表4 表紙の内容分析結果 (軍事要素の有無と年代とのクロス表, n=419) ***

			年代			合計
			戦前 (1924 ~ 1930)	戦中 (1931 ~ 1945)	戦後 (1946 ~ 1960)	
軍事関係の要素	ない	件数	72	92	166	330
		%	97.3%	54.4%	94.3%	78.8%
	ある	件数	2	77	10	89
		%	2.7%	45.6%	5.7%	21.2%
合計		件数	74	169	176	419
		%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

表5 表紙の内容分析結果 (登場するヒト, ものと年代のクロス表, n=419)

登場するヒト, もののランキング	戦前 (1924 ~ 1930)	戦中 (1931 ~ 1945)	戦後 (1946 ~ 1960)	合計
全ての飛行機 ***	18.9%	42.6%	11.4%	25.3%
全ての船舶 ***	18.9%	34.9%	5.1%	19.6%
5. その他の成人男性 (およそ 20 歳以上) ***	41.9%	15.4%	5.7%	16.0%
13. その他の飛行機 **	17.6%	20.1%	6.8%	14.1%
1. 少年 ***	37.8%	10.1%	7.4%	13.8%
11. その他の船舶 ***	17.6%	18.9%	5.1%	12.9%
12. 戦闘機 ***	1.4%	24.3%	5.1%	12.2%
3. 軍人 (男性) ***	0.0%	28.4%	1.1%	11.9%
8. その他の動物 (魚類, 爬虫類, 哺乳類など) n.s.	14.9%	7.7%	14.8%	11.9%
20. そのほかの機械類 n.s.	9.5%	9.5%	15.3%	11.9%
26. 模型 ***	2.7%	2.4%	19.9%	9.8%
23. 天体 n.s.	5.4%	5.9%	12.5%	8.6%
10. 軍艦 ***	1.4%	18.9%	0.0%	7.9%
全ての車 n.s.	6.8%	8.9%	7.4%	7.9%
16. 鉄道 n.s.	12.2%	9.5%	4.5%	7.9%
15. その他の自動車 n.s.	6.8%	5.3%	6.8%	6.2%
9. 植物 ***	2.7%	0.6%	10.2%	5.0%
7. 虫 (昆虫など) ***	1.4%	0.0%	9.1%	4.1%
17. そのほかの乗り物 n.s.	5.4%	3.6%	2.8%	3.6%
2. 少女 ***	12.2%	0.0%	2.3%	3.1%
21. 実験器具, 工作器具など n.s.	4.1%	1.8%	1.7%	2.1%
18. ラジオ・無線機 n.s.	4.1%	0.6%	2.3%	1.9%
6. 成人女性 (およそ 20 歳以上) n.s.	1.4%	1.8%	1.7%	1.7%
14. 戦車 *	0.0%	3.6%	0.6%	1.7%
4. 科学者 (男性) n.s.	1.4%	1.8%	0.6%	1.2%
19. テレビ *	4.1%	0.0%	1.1%	1.2%
24. 岩石類 (宝石含む) n.s.	1.4%	0.6%	1.1%	1.0%
22. 薬品類, 医療・衛生関係 (細菌含む) など n.s.	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
25. その他 n.s.	14.9%	8.3%	6.8%	8.8%

一方で、「5. その他の成人男性 (およそ 20 歳以上)」は、「戦前」41.4%→「戦中」15.4%→「戦後」5.7%と時系列的に減少傾向にあり、「1. 少年」も同様の傾向がある。科学や工作と「男らしさ」との結びつきが、ゆるやかにほどけていく傾向かと解釈したいところだが、「2. 少女」が、「戦前」12.2%→「戦中」0.0%→「戦後」2.3%と変化していることと対比させると、むしろ「戦中」に至って、ますます「男らしさ」の文化へと傾いていったことが窺えるデータと理解すべきであろう(「2.

少女」が「戦中」になると、まったく登場しなくなるのは、大きな変化である)。

また興味深いのは、「16. 鉄道」と「14 + 15. 全ての車」については、統計的に有意な増減の傾向が見られなかったことだろう。もともと割合が高いわけでもなく、また決して、「戦後」に増加したわけでもないことから、やはりその点でも、先行研究が示唆したように、メジャーではなかったものが、花形の趣味に結果的に躍り出ることになったものと解釈したほうが妥当かもしれない。

図2 「戦前」の『子供の科学』の表紙

(左：1924 (大正13) 年12月号, 右：1925 (大正14) 年4月号 とともに兵庫教育大学附属図書館所蔵)



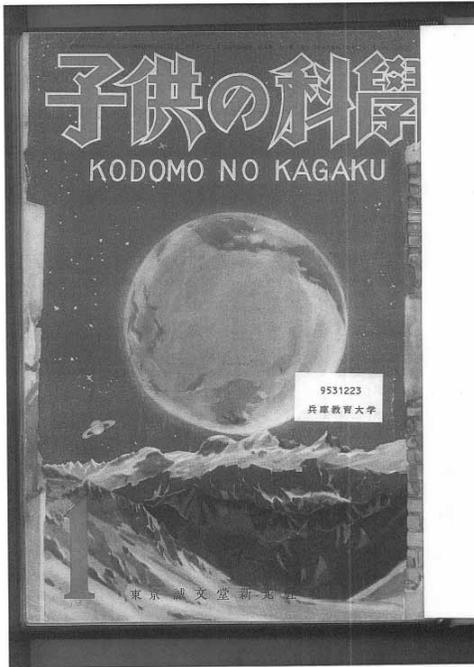
図3 「戦中」の『子供の科学』の表紙

(左：1938 (昭和13) 年7月増刊号 東京都立多摩図書館所蔵, 右：1943 (昭和18) 年7月号 夢の図書館所蔵)



図4 「戦後」の『子供の科学』の表紙

(左：1946(昭和21)年1月号 兵庫教育大学附属図書館所蔵, 右：1958(昭和33)年1月号 東京都立多摩図書館所蔵)



4.2. 『子供の科学』の記事の概要

次に、記事を対象とした分析結果について触れていこう。先にも述べたとおり、分析対象とした記事総件数は15,250件で、うち「戦前」3,258件、「戦中」6,802件「戦後」5,190件となっている。結論を先取りすれば、総件数が多くなる分だけ、割合で示した場合の傾向が、表紙よりは読み取りにくいといえるかもしれない。

まず表6から、記事それ自体としての特徴を見ていくと、「記事形式」としては、当然のことながら、「その他一般の記事」が66.9%と最も多いが、それ以外では、「グラビア」が21.9%と多く、文字だけでなく、ビジュアルな情報も多く伝えようとしていたことが窺える。「内容」では、「読み物」が61.1%と過半数を占めるのだが、次に「工作記事」が14.2%を占めているのは注目ししよう。次節では、この「工作記事」だけに絞って、さら

に詳細な分析を展開していく。「(扱っている)国、地域」については、おそらくは日本国内のことを述べているものが多数とは思われるものの、断言する根拠に乏しい場合は、「明示なし」としたため、このカテゴリーが86.6%と圧倒的になってしまった。だが明示されている記事の中で、「日本」5.4%と「欧米」5.3%がほぼ同じぐらいなのは興味深い結果である。そして「軍事関係の要素」については、「ある」の割合が、表紙よりは少ない8.1%となったが、やはりこれも時代によって傾向が変わってくるものである。

つづけて、表7から「書き手」について見ると、残念ながらこれも「不明」であるものが39.4%と最も多くなってしまっているが、「軍人」はトータルで見ればあまり多くなく、むしろ「科学者・研究者・教員・技術者」が20.6%と比較的多くを占めていることが分かった。「書き手の性別」に

表6 記事の内容分析結果（記事形式や内容、テーマ、扱った国、地域、n=15250）

記事形式	件数	%
扉絵	86	0.6
グラビア	3,342	21.9
読者関連ページ	1,350	8.9
付録	270	1.8
その他一般の記事	10,202	66.9
内容	件数	%
工作記事	2,163	14.2
実験観察記事	1,496	9.8
小説	287	1.9
地誌	571	3.7
特定人物の記事	433	2.8
読み物	9,320	61.1
その他	980	6.4
国、地域	件数	%
日本	827	5.4
欧米	805	5.3
アジア	202	1.3
その他	213	1.4
明示なし	13,203	86.6
軍事関係の要素	件数	%
ない	14,020	91.9
ある	1,230	8.1
合計	15,250	100.0

表7 記事の内容分析結果（書き手とその性別、n=15250）

書き手	件数	%
軍人（海軍）	92	0.6
軍人（陸軍）	129	0.8
軍人（その他）	11	0.1
科学者・研究者・教員・技術者（それぞれ民間を含む）	3,136	20.6
その他	5,875	38.5
不明	6,007	39.4
合計	15,250	100.0
書き手の性別	件数	%
男性	8,986	58.9
女性	55	0.4
その他・不明	6,209	40.7
合計	15,250	100.0

については、「その他・不明」がこれも40.7%と多いが、「女性」と明示されているものはわずかに0.4%であり、事実上はほぼ男性によって占められていると解釈して間違いないだろう（結果を先取りすれば、この極端なまでの女性の少なさは、時代によっても変わらないものであった。）

続けて、表8は、登場するヒト、ものをランキング形式で示したものだが、表紙とは違って、かなり傾向がばらけているといえるだろう。比較を企図して共通のコードを使ったためでもあるのだ

表8 記事の内容分析結果（登場するヒト、もの、n=15250）

登場するヒト、ものランキング	件数	%
20. その他の機械類	1,852	12.1
23. 天体	1,130	7.4
8. その他の動物（魚類、爬虫類、哺乳類など）	1,001	6.6
<u>(12 + 13. 全ての飛行機)</u>	864	5.7
26. 模型	764	5.0
9. 植物	640	4.2
<u>(10 + 11. 全ての船舶)</u>	599	4.0
13. その他の飛行機	572	3.8
16. 鉄道	512	3.4
18. ラジオ・無線機	508	3.3
7. 虫（昆虫など）	377	2.5
11. その他の船舶	374	2.5
4. 科学者（男性）	337	2.2
22. 薬品類、医療・衛生関係（細菌含む）など	321	2.1
21. 実験器具、工作器具など	309	2.0
12. 戦闘機	292	1.9
10. 軍艦	225	1.5
<u>(14 + 15. 全ての車)</u>	218	1.4
5. その他の成人男性（およそ20歳以上）	210	1.4
17. その他の乗り物	184	1.2
15. その他の自動車	171	1.1
1. 少年	158	1.0
24. 岩石類（宝石含む）	121	0.8
3. 軍人（男性）	60	0.4
14. 戦車	47	0.3
19. テレビ	50	0.3
2. 少女	18	0.1
6. 成人女性（およそ20歳以上）	17	0.1
25. その他	6,324	41.5

が、「20. その他の機械類」や「25. その他」が多くなってしまい、この点は今後の課題である。それを除くと、「23. 天体」7.4%、「8. その他の動物」6.6%、「(12 + 13. 全ての飛行機)」5.7%と続くが、表紙と比べると、割合の差が大きく開いていないのも特徴的である。またさらに、表紙と違っているのは、ヒトに焦点を当てる記事の割合が少ないということだろう。「4. 科学者(男性)」でも2.2%しかなく、「5. その他の成人男性」も1.4%、「1. 少年」も1.0%しかない。そして総数

では、表紙よりもはるかに多いにもかかわらず、「2. 少女」「6. 成人女性」ともに0.1%とほぼ登場しておらず、記事を見てみると、さらに男性に偏った内容であることが窺えるだろう。

次に、いくつかの興味深い傾向の見られた項目に絞って、年代別の分析を展開していこう。表9は「内容」について、年代別の傾向を見たものだが、「読み物」が「戦前」71.7%→「戦中」62.5%→「戦後」52.6%と減少していくのと入れ替わりに、「工作記事」や「実験観察記事」がそれぞれ、

表9 記事の内容分析結果 (内容と年代とのクロス表 n=15250) ***

			年代			合計
			戦前 (1924～1930)	戦中 (1931～1945)	戦後 (1946～1960)	
内容	工作記事	件数	2,042	1,102	857	2,163
		%	6.3%	16.2%	16.5%	14.2%
	実験観察記事	件数	64	465	967	1,496
		%	2.0%	6.8%	18.6%	9.8%
	小説	件数	82	120	85	287
		%	2.5%	1.8%	1.6%	1.9%
	地誌	件数	219	316	36	571
		%	6.7%	4.6%	0.7%	3.7%
	特定人物の記事	件数	148	165	120	433
		%	4.5%	2.4%	2.3%	2.8%
	読み物	件数	2,336	4,254	2,730	9,320
		%	71.7%	62.5%	52.6%	61.1%
	その他	件数	205	380	395	980
		%	6.3%	5.6%	7.6%	6.4%
合計		件数	3,258	6,802	5,190	15,250
		%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

表10 記事の内容分析結果 (軍事関係の要素の有無と年代とのクロス表 n=15250) ***

			年代			合計
			戦前 (1924～1930)	戦中 (1931～1945)	戦後 (1946～1960)	
軍事関係の要素	ない	件数	3,124	5,761	5,135	14,020
		%	95.9%	84.7%	98.9%	91.9%
	ある	件数	134	1,041	55	1,230
		%	4.1%	15.3%	1.1%	8.1%
合計		件数	3,258	6,802	5,190	15,250
		%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

6.3%→16.2%→16.5%, 2.0%→6.8%→18.6%と増加していくのも興味深い。徐々に、受動的に読むだけから、能動的に「作ること」や「実験すること」のための情報が増えているわけだが、さらに細かくいえば、「工作記事」は「戦中」から、「実験観察記事」は「戦後」に、大きく増加に転じているのも興味深い特徴であろう。この点で、工作趣味の原点が、こうした科学雑誌にあるといえるのは間違いないが、特に「戦中」において急激な増加を見せたことは気に留めておくべきであろう。

また表10を見ると、当然ではあるが、「軍事関係の要素」について、「ある」の割合が「戦中」に15.3%と最も高く、「戦後」でも大幅に減少はしていても、1.1%と決してゼロではない点も興味深い結果である（主として、日本以外の話題であった）。

そのほかに表11では、国や地域が明示されている記事だけに絞って分析をしているが（n=2047）、その結果、「欧米」の割合が、「戦前」43.2%→「戦中」35.9%→「戦後」44.5%と、「戦中」に一時減少し、また「戦後」増加に転じるのが特徴的といえるだろう。

そして表12では、登場するヒト、ものをランキング化した上で、年代別の登場割合を示しているが、「その他」が多くを占めているため、分析が難しいが、「全ての飛行機」「全ての船舶」など、表紙で多くを占めていたものが、同様の傾向として、「戦中」に増加して「戦後」に減少しているということ、また入れ替わりに、「戦後」に「23.天体」が増加に転じていることなどが特徴的といえるだろう。

（辻 泉）

表11 記事の内容分析結果（扱った国や地域と年代とのクロス表 n=2047）***

			年代			合計
			戦前 (1924～1930)	戦中 (1931～1945)	戦後 (1946～1960)	
国、地域	日本	件数	171	505	151	827
		%	32.7%	44.0%	40.3%	40.4%
	欧米	件数	226	412	167	805
		%	43.2%	35.9%	44.5%	39.3%
	アジア	件数	30	147	25	202
		%	5.7%	12.8%	6.7%	9.9%
	その他	件数	96	85	32	213
		%	18.4%	7.4%	8.5%	10.4%
合計		件数	523	1,149	375	2,047
		%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

表 12 記事の内容分析結果 (登場するヒト, ものと年代とのクロス表 n=15250) ***

登場するヒト, もののランキング	戦前 (1924 ~ 1930)	戦中 (1931 ~ 1945)	戦後 (1946 ~ 1960)	合計
20. その他の機械類 ***	6.8%	13.3%	14.0%	12.1%
23. 天体 ***	5.5%	5.8%	10.7%	7.4%
8. その他の動物 (魚類, 爬虫類, 哺乳類など) ***	11.0%	4.8%	6.1%	6.6%
全ての飛行機 ***	4.2%	8.1%	3.2%	5.6%
26. 模型 ***	2.8%	5.8%	5.3%	5.0%
9. 植物 *	4.6%	3.7%	4.6%	4.2%
全ての船舶 ***	3.4%	5.7%	1.9%	3.9%
13. その他の飛行機 ***	3.5%	4.8%	2.6%	3.8%
16. 鉄道 **	2.6%	3.9%	3.2%	3.4%
18. ラジオ・無線機 ***	2.3%	2.6%	5.0%	3.3%
7. 虫 (昆虫など) ***	1.8%	1.6%	4.0%	2.5%
11. その他の船舶 ***	2.3%	3.0%	1.8%	2.5%
4. 科学者 (男性) ***	2.8%	1.7%	1.5%	2.2%
22. 薬品類, 医療・衛生関係 (細菌含む) など **	1.3%	2.3%	2.4%	2.1%
21. 実験器具, 工作器具など ***	0.7%	3.4%	1.0%	2.0%
12. 戦闘機 ***	0.7%	3.4%	0.7%	1.9%
10. 軍艦 ***	1.0%	2.7%	0.1%	1.5%
5. その他の成人男性 (およそ 20 歳以上) ***	4.0%	0.8%	0.4%	1.4%
全ての車 n.s.	1.1%	1.6%	1.4%	1.4%
17. その他の乗り物 **	0.6%	1.3%	1.4%	1.2%
15. その他の自動車 n.s.	1.0%	1.1%	1.3%	1.1%
1. 少年 *	0.6%	1.2%	1.1%	1.0%
24. 岩石類 (宝石含む) n.s.	0.8%	0.7%	0.9%	0.8%
3. 軍人 (男性) ***	0.3%	0.7%	0.0%	0.4%
14. 戦車 ***	0.1%	0.6%	0.1%	0.3%
19. テレビ **	0.2%	0.2%	0.5%	0.3%
2. 少女 n.s.	0.0%	0.2%	0.1%	0.1%
6. 成人女性 (およそ 20 歳以上) *	0.2%	0.1%	0.0%	0.1%
25. その他 ***	46.7%	40.0%	40.1%	41.5%

5. 「工作記事」の分析

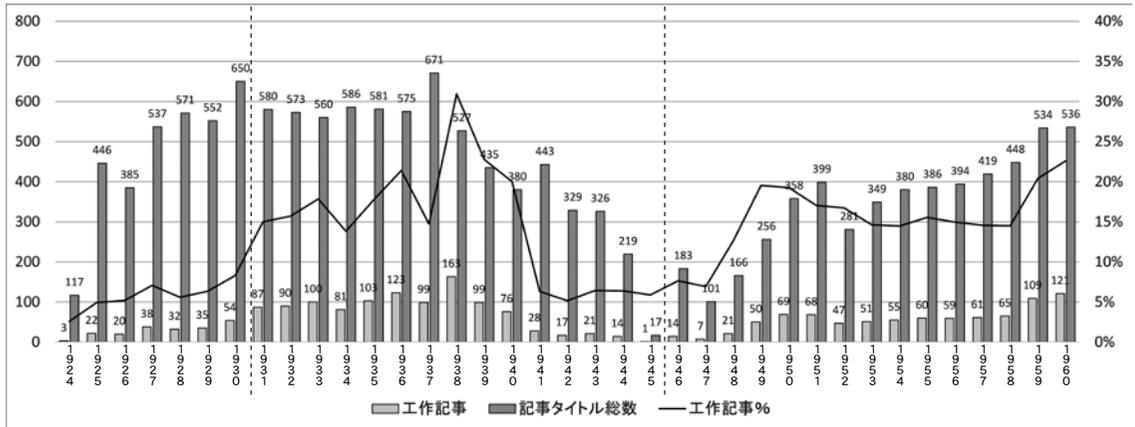
5.1. 「工作記事」の全体的な傾向

続いて記事のうち, 本論文の目的に倣って, 「工作記事」に限定して, さらに詳細な分析を展開しよう。あらためて記すと, 「工作記事」とは「○○の作り方」「青写真」「設計図」「図面」「模型」「発明」などの工作に関連するキーワードを含むもの, 「製作記事」「製作のページ」「工作」などのカテ

ゴリーに括られるもの, 模型製作展覧会の告知やインタビューなどの間接的に工作と関連するもの, などを指す。

図 5 は, より詳細に, 一年ごとに記事の総数と, 工作記事数および全体比をグラフ化したものである。『子供の科学』は経年によるページ数の増減や, 合併, 増刊, 休刊などがあったため, 記事の総件数は年ごとに上下している。先にも触れたが, 1924 (大正 13) 年は 10 月創刊のため 3 号分のみ

図5 工作記事の分布



しか存在せず、戦中の1945（昭和20）年は戦災により1月から10月まで休刊のため2号分のみ、戦後の1947（昭和22）年は用紙配給事情の悪化のため7号分のみ発行、といったように、諸般の事情の影響を受けているのである。

その中で、記事の総数に対する、工作記事の数量的分布を確認していこう。創刊当初より少しずつ記事数を増やしていった工作記事は、1930年代には全体の15%程度の割合を確保し、安定を見せている。1940年代に入ると割合は下がり、特に1941（昭和16）年は前年と比べて三分の一程度の記事数となる急落を見せるも、そこから戦後までは下げ止まる。1948（昭和23）年から上昇傾向に転じ、1950年代に至って再び全体の15%程度の割合を保つようになる。

1924（大正13）年から1960（昭和35）年にかけて、記事の総数が15,250記事であるのに対して、先にも記したとおり、工作記事の総数は2,163記事であり、その全体に対する割合は14.1%である。それでは、その工作記事の内訳はどのようになっているのか。続いて、工作記事のみに限定して、その通時的な推移を確認したい。

図6は、工作記事における、軍事関係の要素のある記事と、その全体に対する割合を示したグラフである。工作記事の総数が2,163記事であるの

に対し、軍事関係の要素のある記事は109記事であり、その割合は5%である。これは、図7のように、すべての記事に対して軍事要素のある記事の占める割合（8.7%）よりも低い。1930年代に誌面全体で軍事関係の要素が盛り上がっていくのに対して、工作記事においてはその傾向が比較的抑えられていたと判断できる。図6に戻ると、1933（昭和8）年に最多の14記事を数えるが、これ以降に大きく盛り上がることはなかった。割合を見ると、1943（昭和18）年に28.6%、1944（昭和19）年に57.1%と、戦況が逼迫するのと並行して、一時的に跳ね上がっているのが特徴的であり、この点は図7の記事全体に対する割合と比較しても顕著である。さらには、戦後に出現数が急落する点も特筆すべきところである。

表13は、工作記事に限定した、「登場するヒト、もの」と年次とのクロス集計表である。「登場するヒト、もの」については、先述の通り複数回答形式でコーディングを行った。

具体的に各項目を見ていくと、「10. 軍艦」「11. その他の船舶」「12. 戦闘機」「13. その他の飛行機」「14. 戦車」「15. その他の自動車」「16. 鉄道」「17. その他の乗り物」といった、乗り物に関連する項目の数値が全体を通じて大きい。加えて、「18. ラジオ・無線機」「21. 実験器具、工作器具

図6 工作記事における、軍事関係の要素の通時的推移

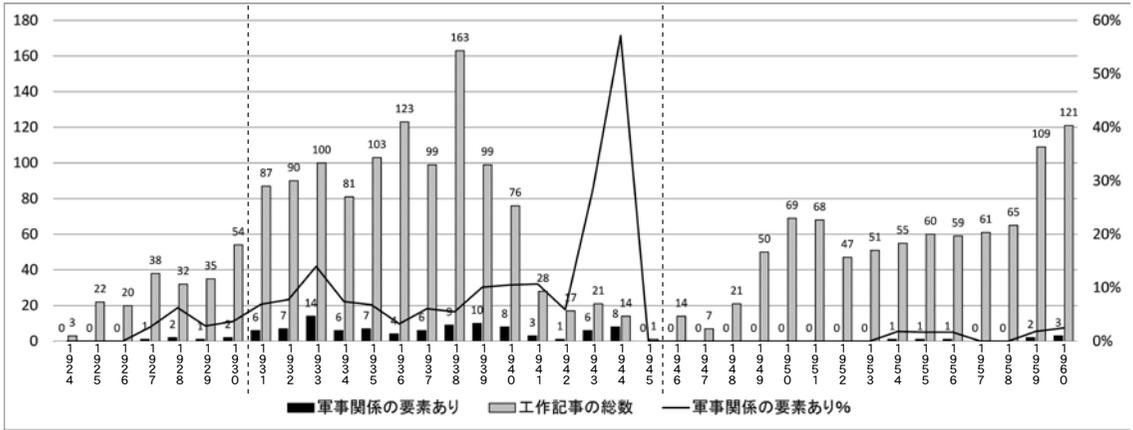


図7 記事全体における、軍事関係の要素の通時的推移

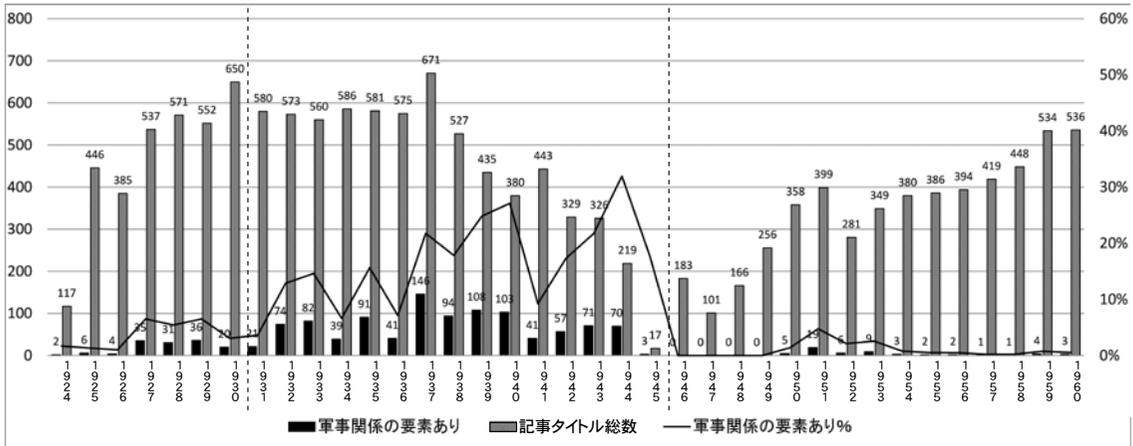


表13 工作記事における、「年」と「登場するヒト、もの」のクロス集計表

	年代																										合計														
	戦前						戦中														戦後																				
	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	1931	1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938	1939	1940	1941	1942	1943	1944	1945	1946	1947	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959	1960				
1. 少年	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1	3	6	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	18				
2. 少女	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
3. 軍人(男性)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
4. 科学者(男性)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
5. その他の成人男性(およそ20歳以上)	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1				
6. 成人女性(およそ20歳以上)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
7. 虫(昆虫など)	0	0	1	0	0	0	1	2	0	0	1	3	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1	1	0	1	0	0	0	1	16				
8. その他の動物(魚類、爬虫類、哺乳類など)	0	2	0	2	0	0	1	5	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1	2	20					
9. 植物	0	3	0	0	0	2	1	1	0	0	1	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	0	0	0	1	15				
10. 軍艦	0	0	0	0	0	1	4	2	6	4	4	2	1	3	1	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	32				
11. その他の船舶	0	0	0	0	1	0	6	3	11	5	5	5	4	1	1	3	2	2	0	2	0	0	0	0	1	1	1	2	1	2	3	2	2	2	8	5	4	87			
12. 戦闘機	0	0	0	0	2	0	0	1	2	5	2	1	0	2	3	7	6	0	0	2	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	1	3	43		
13. その他の飛行機	0	0	0	0	2	3	7	3	10	5	4	7	6	11	6	5	6	6	0	0	0	0	0	0	0	0	3	8	17	4	6	3	1	2	5	2	12	6	150		
14. 戦車	0	0	0	0	0	0	1	1	2	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8		
15. その他の自動車	0	0	1	0	2	0	2	1	2	3	1	1	2	1	0	1	1	3	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2	0	3	2	0	0	0	4	1	3	1	8	5	51
16. 鉄道	0	2	1	0	2	4	12	12	12	16	19	14	12	7	13	3	5	0	2	1	0	0	0	0	1	1	4	7	10	2	4	7	11	6	4	6	1	15	216		
17. その他の乗り物	0	0	0	0	0	0	2	0	2	0	0	1	1	5	12	2	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	3	2	3	6	7	52		
18. ラジオ・無線機	1	6	1	3	3	1	0	0	2	3	2	5	6	1	14	16	11	0	0	0	0	0	0	0	5	0	5	10	12	5	7	5	11	18	6	5	6	34	20	227	
19. テレビ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
20. その他の機械類	0	8	6	5	12	10	16	28	26	33	25	38	14	18	34	15	4	4	11	6	0	0	0	3	5	12	24	24	19	24	21	9	9	10	12	13	16	25	573		
21. 実験器具、工作器具など	0	1	0	0	1	0	3	0	0	0	0	0	16	28	16	17	16	4	0	0	0	0	0	3	0	0	0	1	1	1	1	5	3	2	1	0	1	8	149		
22. 薬品類、医療・衛生関係(細菌含む)など	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	2	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	0	0	1	0	0	0	0	13		
23. 天体	0	1	0	0	1	0	3	4	2	1	1	1	0	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	1	2	1	1	1	0	3	1	1	1	3	5	39			
24. 岩石類(宝石含む)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	6		
25. その他	2	1	0	6	6	9	3	13	15	8	8	10	37	30	37	13	13	7	1	0	1	2	0	1	2	0	8	9	11	4	10	14	10	19	23	22	17	19	399		
26. 模型	0	2	2	2	4	14	27	39	45	56	51	35	21	20	51	15	9	11	9	9	11	0	0	2	7	11	21	29	12	12	13	24	17	16	16	36	46	721			
合計	3	22	20	38	32	35	54	87	90	100	81	103	123	99	163	99	76	28	14	21	14	0	1	14	7	21	50	69	68	47	51	55	60	59	61	65	109	121	2163		

など」も特徴的な値を示している。「20. その他の機械類」および、「25. その他」の残余カテゴリーの数が多いのは、工作の対象となってきたものの多様性を示しているだろう（一方で、設定した項目の網羅性については議論の余地を残している。しかし、KHCoderを用いたプレ調査（詳細は、塩谷（2016）参照）において、出現頻度の高い単語を確認した後、カテゴリーに組み込む工程を経ているため、工作の対象となった主要なものは押さえられたと考える）。「26. 模型」については、これも先述の通り、具体的なものというよりは、その形式に関する項目であり、他の項目とは多少異なる性質を持つ。

工作記事以外で比較の数値の大きかった「7. 虫（昆虫など）」「8. その他の動物（魚類、爬虫類、哺乳類など）」「23. 天体」は、ここでは目立たない結果となっており、工作記事の対象になりやすいものと、なりにくいものとの間に相違があることが確認できる。

続いて、それぞれの項目ごとに、工作記事における通時的な推移を概観していく。

5.2. 「工作記事」に登場するもの

図8では、「10. 軍艦」および、「11. その他の船舶」についてグラフ化を行った。「10. 軍艦」

については合計で32記事であり、1930年代に出現数を伸ばしている。「戦中」も複数回記事に取り上げられるが、「戦後」は全く姿を消し、以降の出現は1956（昭和31）年を待つことになった。一方、「11. その他の船舶」については合計で87記事であり、出現数はそれほど多くないながらも、全体を通じて安定した出現頻度を保っている。戦後では1947（昭和22）年より再出現している。

図9では、「12. 戦闘機」および、「13. その他の飛行機」についてグラフ化を行った。「12. 戦闘機」については合計で43記事であり、1928（昭和3）年に2記事を数え、続いて1930年代に徐々に出現数を伸ばしていく。割合では1939、40（昭和14、15）年、および1943、44（昭和18、19）年に盛り上がりを経験するも、「10. 軍艦」と同様に戦後は一転して姿を消していく。1954（昭和29）年以降に再び出現しはじめ、1960（昭和35）年には3記事を数えた。一方、「13. その他の飛行機」については合計で150記事であり、1929（昭和4）年から安定的に出現数を確保する。割合では、1941、42（昭和16、17）年に大きく盛り上がりを見せるが、1943（昭和18）年からは「12. 戦闘機」と入れ替わるような形で姿を消していく。戦後の再出現は1949（昭和24）年を待つことになるが、それ以降はさらに盛り上がりを見せ、

図8 工作記事における、軍艦およびその他の船舶の通時的推移

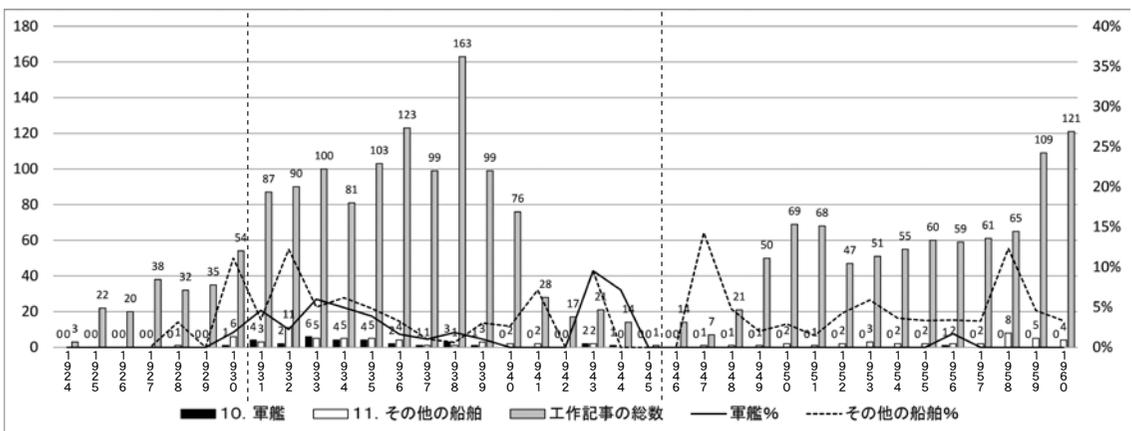


図9 工作記事における、戦闘機およびその他の飛行機の通時的推移

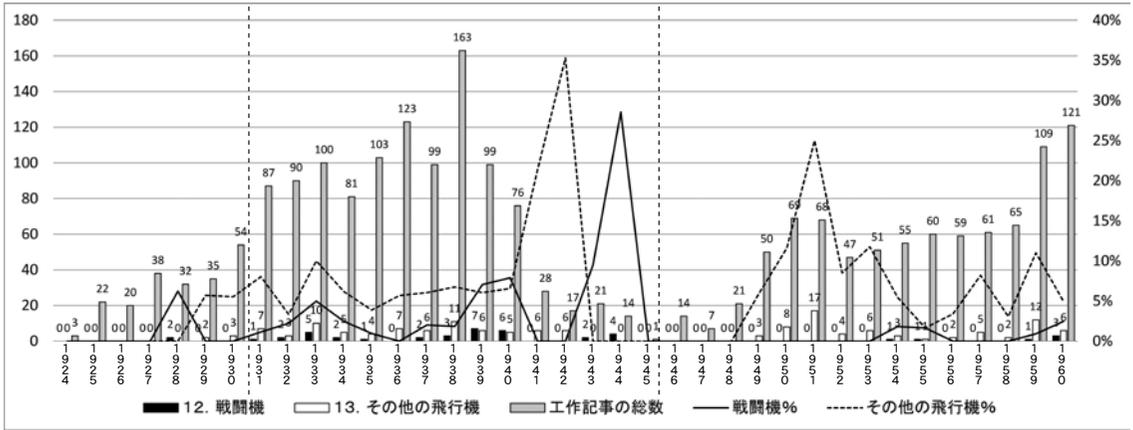
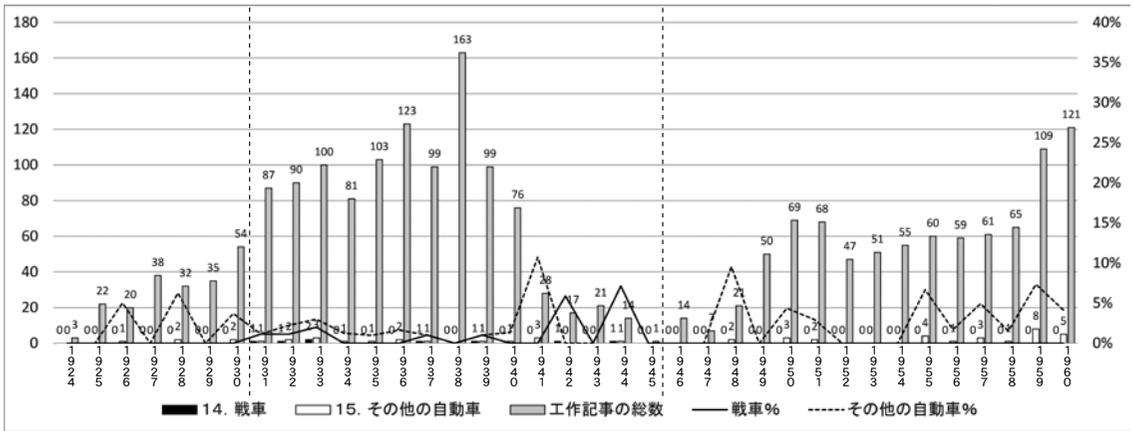


図10 工作記事における、戦車およびその他の自動車の通時的推移



1951（昭和26）年には17記事を数える。その後も安定して誌面に登場してきた工作対象である。

図10では、「14. 戦車」および、「15. その他の自動車」についてグラフ化を行った。「14. 戦車」については合計で8記事であり、出現頻度は低い。1933（昭和8）年に2記事を数えるが、1931（昭和6）年からの「戦中」の期間は年に1記事が出るかどうか、という程度である。一方、「15. その他の自動車」については合計51記事であり、こちらは1926（大正15 = 昭和元年）年をはじめとして、数こそ少ないながらも安定的に出現する。戦後の再出現は1948（昭和23）年の2記事であり、

その後も同様に出現頻度が低い傾向にあったが、1955（昭和30）年以降は出現数が増加している。

図11では、「15. 鉄道」についてのグラフ化を行った。これについては合計で216記事であり、記事数の上下はありながらも、全体を通じて出現頻度が高めである。初出は1925（大正14）年と早く、また1930年代前半には大きく出現数を伸ばし、その後も安定を見せる。ここが工作記事における鉄道の特徴である。1940年代には出現数を落とすが、戦後の1947（昭和22）年には再出現し、それ以降は波のような増減を経験する。

図12では、「18. ラジオ・無線機」についての

図11 工作記事における、鉄道の通時的推移

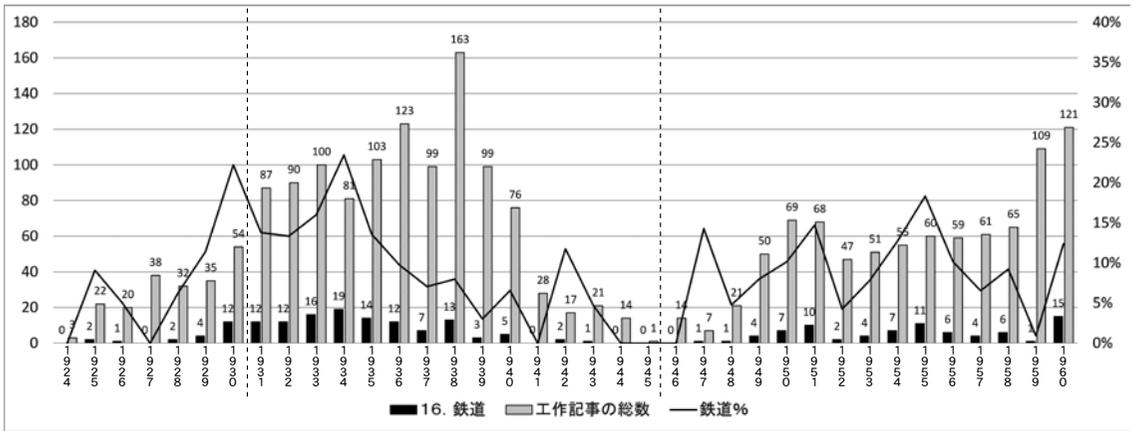
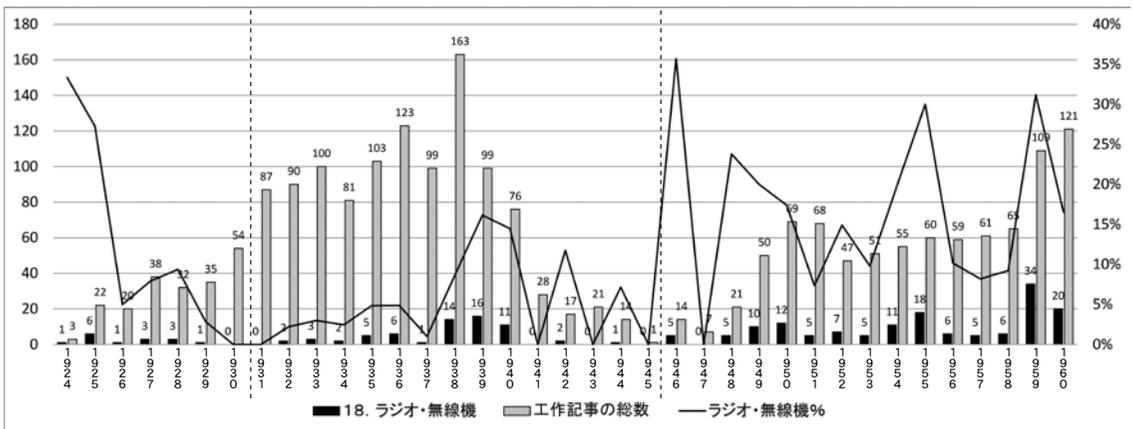


図12 工作記事における、ラジオ・無線機の通時的推移



グラフ化を行った。これについては合計で227記事であるが、工作記事のほかにもラジオの原理説明を行う記事は多かったことを付記しておきたい。1925（大正14）年は6記事を数えるなど、既に創刊当初から盛り上がっていたが、乗り物と比較すると、1930年代前半ではむしろ落ち着いているようにも捉えられる。1938～40（昭和13～15）年には一時的に、それぞれ10記事を超える盛り上がりを見せる。戦後は1946（昭和21）年に5記事を数え、出現数を保ち続けたまま1959（昭和34）年には34記事を数えるようになる。ラジオ・無線機の特徴としては、1920年代にお

ける出現の早さ、戦後の再出現の早さと、それ以降の出現数の安定が挙げられる。

図13では、「21. 実験器具、工作器具」についてのグラフ化を行った。これらについては合計で149記事である。1935～40（昭和10～15）年に出現数が集中しているのが顕著である。戦後では1946（昭和21）年に3記事を数え、1954（昭和29）年の5記事、1960（昭和35）年の8記事と、点在する形となっている。いわば、道具を自作して用意するという特徴的な傾向が、1930年代後半に見られ、当時において、手作りや自作に対する熱が高まったことの証左とも受け取れるように

図13 工作記事における、実験器具、工作器具などの通時的推移

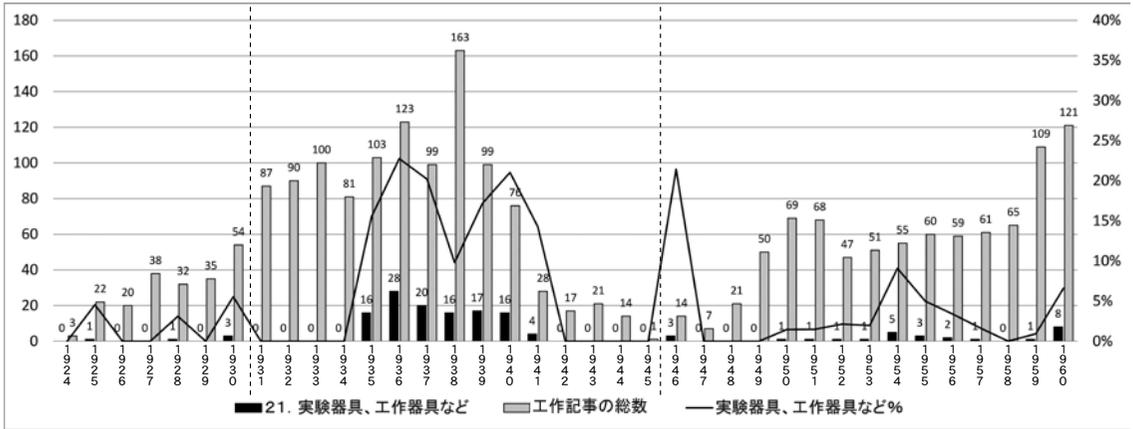
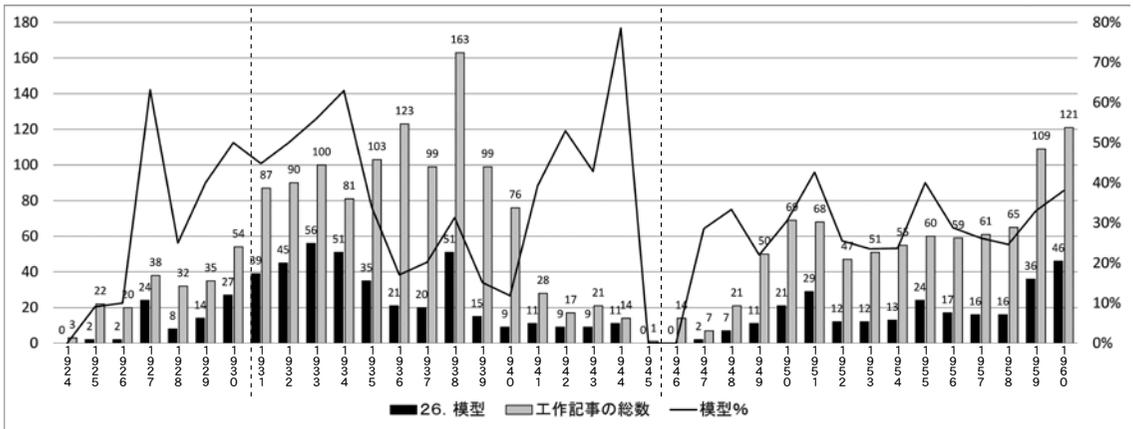


図14 工作記事における、模型の通時的推移



思われる。

図14では、「26. 模型」についてのグラフ化を行った。これについては、以上の項目とは独立した形でカウントを行った結果、合計で721記事あり、出現数もその割合も高い水準を保っている。1927（昭和2）年の63.2%をはじめとして、早い段階から盛り上がりを見せており、1927～34（昭和2～9）年では、工作記事において模型が占める割合がかなり高いことがわかる。続く1935～40（昭和10～15）年では比較的落ち着きを見せるが、まさに「戦中」にあたる1941～44（昭和16～19）年では特に盛り上がり、1944（昭和

19）年には78.6%と、過熱した様子が窺える。「戦後」でも模型という形式は安定して出現しており、1947（昭和22）年以降は30%前後の安定した水準を保つようになる。このように、『子供の科学』においては、「工作記事」が一つの特徴的な記事であったが、その中で、多少時代の変動はあれ、模型という対象も、数多く登場してきたものとして、理解しておかねばならないだろう。蛇足ながら記しておけば、それは女性の手芸が実用に役立つ日用品を作るのとは対照的な、工作物だと指摘してもよいだろう。

ここまでは、それぞれの項目における通時的な

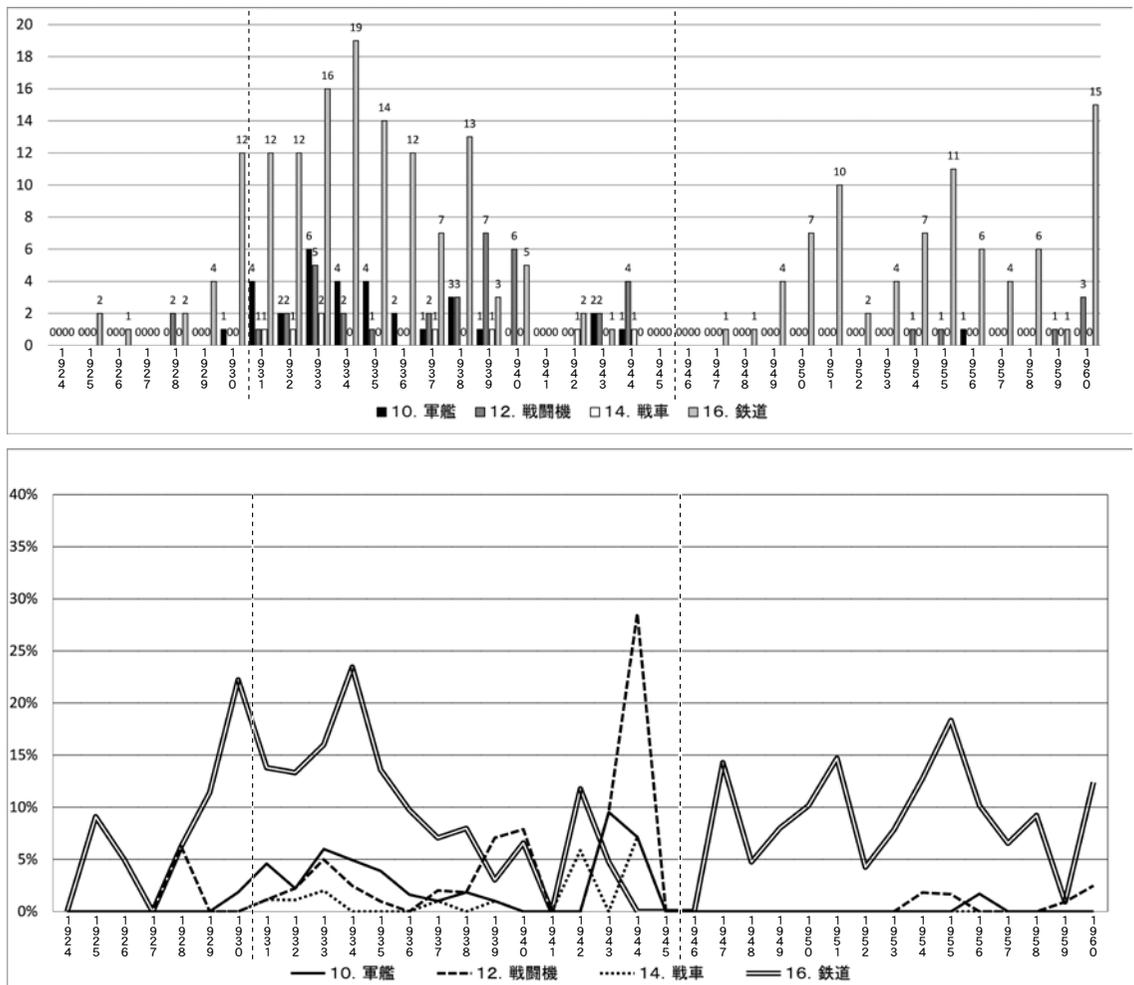
推移を見てきたが、続いて「工作記事」に特徴的であった乗り物関係の記事について、改めて比較検討を重ねていこう。

図15は、「10. 軍艦」、「12. 戦闘機」、「14. 戦車」、「15. 鉄道」についてまとめたグラフである。1945（昭和20）年を境に、「10. 軍艦」、「12. 戦闘機」、「14. 戦車」がそれぞれ、「工作記事」から一転して姿を消したことが確認できるが、その落差が一番大きく感じられるのは、「12. 戦闘機」であろう。当時の社会背景から考えると、各地の戦争が工作記事の内容に如実に影響しているとも

考えられ、1931（昭和6）年の満州事変の時期では「12. 戦闘機」よりも「10. 軍艦」の記事が増え、1941（昭和16）年からの太平洋戦争の時期では「10. 軍艦」よりも「12. 戦闘機」の記事が増えたともいえるだろう。いわば兵器としての主役が交替したことの表れとも解釈できるのではないだろうか。これらの軍事的要素を持つものと比較すると、鉄道は全体を通じて出現数を保っていたといえそうである。

続いて、図16から「全ての船舶」、「全ての飛行機」、「全ての車」のそれぞれと、「15. 鉄道」

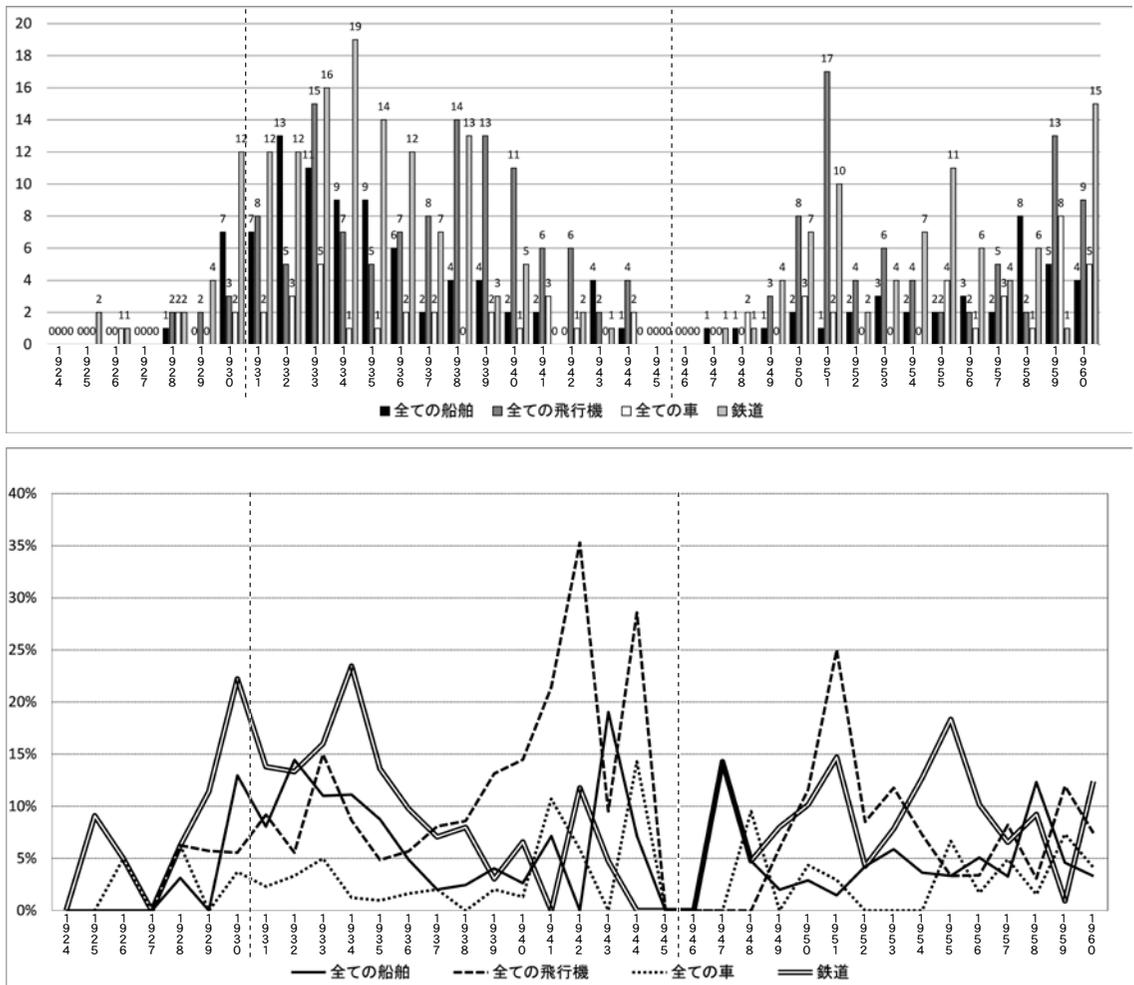
図15 工作記事における、軍艦、戦闘機、戦車、鉄道の記事タイトル数、および全体比



を比較する。この図からは、より明確に、それぞれの乗り物が「工作記事」の対象として盛り上がりを見せた時期が比較できよう。「全ての船舶」については、1930年代前半に出現数のピークを迎えており、その後は飛行機の影に隠れがちになるが、時折頭を覗かせる。「全ての飛行機」については、まさに「戦中」の1939～44（昭和14～19）年にピークを迎える。よく言われるような、GHQによる飛行機研究の禁止によって、「戦後」の再出現は遅れるも、1951（昭和26）年には割合にして25%となり、勢いを盛り返している。「全

ての車」については、他の乗り物を単独で上回ることほとんどなく、全体を通じて出現数も少ないが、それでも他の乗り物、特に飛行機のたどる傾向を縮小してなぞっているように見える。「15. 鉄道」については、1925（大正14）年と出現が早く、1930年代前半にピークを迎えて他の乗り物を上回るが、1937（昭和12）年頃から飛行機に主役を奪われる。1940年代前半は他の乗り物の陰に隠れるが、戦後は1947（昭和22）年に船舶とともに再出現、それ以降は1955（昭和30）年に11記事（18.3%）と、飛行機を超える場面

図16 工作記事における、全ての船舶、飛行機、車、鉄道の記事タイトル数、および全体比



も出てくるようになる。

特に本節の分析においては、この図16が最も重要であろう。今日における鉄道趣味の相対的な規模の大きさに比して、全体としての出現頻度で見ると、「15. 鉄道」は少ないように思われるのかもしれない。だが、むしろその特徴は、根強く掲載され続けていたところにあるのだろう。それゆえに、一方では「全ての船舶」や「全ての飛行機」が、「戦中」に過剰ともいえるほどの上昇を見せる代わりに「戦後」減少していく中で、「15. 鉄道」が、「工作記事」の、あるいは工作趣味、ないし男性たちの趣味として、やはりあくまで結果として中心的な立場に置かれることになっていったと解釈できるのではないだろうか。

(塩谷 昌之)

6. ま と め

本論文では、「作ること」の意味が問い直される今日において、男性的とされる工作趣味、鉄道趣味の形成、変容過程を追うために、代表的な科学雑誌『子供の科学』の1924（大正13）年10月の創刊号から、1960（昭和35）年に刊行された号を対象として、その表紙および記事に対する内容分析を展開してきた。

結果については、すでに本文中に記してきたとおりだが、分析上の知見としては、先行研究が質的なアプローチから示唆していたことが、あらためて量的な内容分析によって確かめられたといえるのではないだろうか。

具体的にいえば、『子供の科学』の表紙や記事において、登場する割合でいえば、圧倒的に女性が少なく、やはり男性向けのものであったことがあらためて確認されるとともに、「工作記事」が一定の割合で掲載され、やはり「作ること」が重要な位置づけにあったことが窺えた。

また「工作記事」は、「戦前」から「戦中」「戦後」に至って増加傾向にあったのだが、そこにおいては、まず「戦前」において、工作が科学と結

びつき、さらに「戦中」において、当時の独特な社会背景の中で、大きな影響を受けたということであらためて指摘しておかねばならないだろう。登場するもので見ても、「戦中」には、戦闘機に代表される飛行機や、軍艦に代表される船舶が増加する時期であり、そうしたミリタリーな関心とともに、工作が隆盛を迎えていったのであった。

その一方で、「戦後」に至り、これらが姿を消していく中で、他のものが工作趣味の、あるいは男性的な趣味の中心に、結果として位置づけられていくこととなり、やはりその一つが鉄道であった。よって鉄道については、先の二つの乗り物と比べれば、むしろ出現頻度が時代によって大きく変わらなかったことが特徴的であり、だからこそ、あくまで“結果的に”中心に躍り出たであろうことが窺えた。またこうした記述をするにあたって、一般によく用いられる「戦前／戦後」といった二項対立図式を用いるよりも、松井（2017）が述べるような、「戦前／戦中／戦後」の三段階図式のほうが、より正確な記述をなしえたのも、知見といえよう。

ほかに今後の展望として、方法論的には、本論文では1960（昭和35）年までで分析を終えたが、こうした射程をさらに後の時代まで伸ばしていくことも考えられるし、さらに、目次の記載内容を中心とした量的な内容分析だけでなく、質的な内容分析の手法を用いて、記事の詳細な内容にまで踏み込んだ分析を展開していくことも重要だろう。

「シンギュラリティ」も間近に迫りつつあるといわれる今日、あえて「作ること」の重要性を問い直すためにも、こうした工作趣味、鉄道趣味に関する研究や分析を、さらに幅広く展開していくことが求められているといえよう。

(辻 泉)

参考文献

阿部恒久・大日方純夫・天野正子編、2006a、『男性史

- 1 『男たちの近代』日本経済評論社。
- 阿部恒久・大日方純夫・天野正子編, 2006b, 『男性史2 モダニズムから総力戦へ』日本経済評論社。
- 阿部恒久・大日方純夫・天野正子編, 2006c, 『男性史3 「男らしさ」の現代史』日本経済評論社。
- 天野正子・石谷二郎・木村涼子, 2007, 『モノと子どもの戦後史』吉川弘文館。
- Arendt, Hannah, 1958, *The Human Condition*, University of Chicago Press (= 1994, 志水速雄訳, 『人間の条件』ちくま学芸文庫)。
- 二上洋一, 1978, 『少年小説の系譜』幻影城。
- 廣重徹, 1973 = 2002, 『科学の社会史(上) 一戦争と科学』岩波書店。
- 廣重徹, 1973 = 2003, 『科学の社会史(下) 一経済成長と科学』岩波書店。
- 今田絵里香, 2007, 『「少女」の社会史』勁草書房。
- 石井研堂, 1902, 『少年工芸文庫 第一編 鐵道の巻』博文館。
- 伊藤公雄, 1993, 『「男らしさ」のゆくえー男性文化の文化社会学』新曜社。
- 伊藤公雄, 1996, 『男性学入門』作品社。
- 伊藤公雄, 2004, 「戦後男の子文化の中の「戦争」」中久郎編『戦後日本の中の「戦争」』世界思想社: 152-79。
- 岩橋郁郎, 1988, 『「少年倶楽部」と読者たち』刀水書房。
- 柏本文吾・小森長生, 2007, 『工作の時代ー『子供の科学』で大人になった』INAX 出版。
- 木村直恵, 1998, 『<青年>の誕生ー明治日本における政治的実践の転換』新曜社。
- 子供の科学編集部編, 1987, 『復刻ダイジェスト版 子供の科学 1924-1943』誠文堂新光社。
- 串間努, 1997 『子供の大科学ー「あの頃」遊んだふしき玩具, 教材』光文社文庫。
- Kurzweil, Ray, 2005, *The Singularity is Near: When Humans Transcend Biology*, New York: Viking (= 2007, 井上健監訳, 小野木明恵・野中香方子・福田実共訳, 『ポストヒューマン誕生ーコンピュータが人類の知性を超えるとき』日本放送出版協会)。
- 松井広志, 2017, 『模型のメディア論ー時空間を媒介する「モノ」』青弓社。
- 三輪修三, 2012, 『工学の歴史ー機械工学を中心に』筑摩書房。
- 宮台真司・石原英樹・大塚明子, 1992・1993 = 2007, 『増補 サブカルチャー神話解体ー少女・音楽・マンガ・性の変容と現在』筑摩書房。
- 宮台真司・辻泉・岡井崇之編, 2009, 『男らしさの快樂ーポピュラー文化から見たその実態』勁草書房。
- 宮澤孝一, 1977a, 「鉄道趣味の潮流(上)」『蒸気機関車』キネマ旬報社, 50: 97-99。
- 宮澤孝一, 1977b, 「鉄道趣味の潮流(下)」『蒸気機関車』キネマ旬報社, 51: 69-71。
- 森下一期, 1986, 「工作100年ー工作(手工)教育の歴史を通して考える」『子どもの遊びと手の労働研究』子どもの遊びと手の労働研究会, 154: 1-3。
- Mosse, George, L., 1988, *Nationalism and Sexuality: Middle-Class Morality and Sexual Norm in Modern Europe*, Wisconsin: The University of Wisconsin Press (= 1996, 佐藤卓巳・佐藤八寿子訳, 『ナショナリズムとセクシュアリティ』柏書房)。
- Mosse, George, L., 1996, *The Image of Man: The Creation of Modern Masculinity*, New York: Oxford University Press (= 2005, 細谷実・小玉亮子・海妻径子訳, 『男のイメージー男性性の創造と近代社会』作品社)。
- 西英生編, 1997, 『少年小説大系別巻5 少年小説研究』三一書房。
- 尾崎秀樹, 1997, 『思い出の少年倶楽部時代ーなつかしの名作博覧会』講談社。
- 佐藤忠男, 1959 = 1993, 「少年の理想主義」『大衆文化の原像』岩波書店: 98-144。
- Sennett, Richard, 2008, *The craftsman*, Yale University Press (= 2016, 高橋勇夫訳『クラフツマンー作ることは考えることである』筑摩書房)。
- 塩谷昌之, 2014, 「鉄道趣味の地平線ー趣味を捉える枠組みについての一考察」『現代風俗学研究』現代風俗研究会東京の会, 15号: 84-97。
- 塩谷昌之, 2016, 「『子供の科学』目次の通時的分析から見る鉄道模型の周縁ーテキストマイニングの社会学的利用5」第89回日本社会学会大会報告原稿。
- 田口武二郎, 1936 = 2003, 『復刻版 少年技師ハンドブック 蒸気機関車の作り方』誠文堂新光社。

- 高橋雄造, 2011, 『ラジオの歴史—工作の〈文化〉と電子工業のあゆみ』法政大学出版局.
- 瀧川光治, 2001, 「日本の近代化と科学読み物」鳥越信編著『はじめて学ぶ日本児童文学史』ミネルヴァ書房: 35-51.
- 田宮俊作, 2004, 『田宮模型をつくった人々』文藝春秋.
- 辻泉, 2008, 『鉄道の意味論と〈少年文化〉の変遷—日本社会の近代化とその過去・現在・未来』平成19年度東京都立大学大学院社会科学研究所博士學位論文.
- 辻泉, 2009, 「なぜ鉄道は「男のロマン」になったのか—「少年の理想主義」の行方」宮台真司・辻泉・岡井崇之編『「男らしさ」の快樂—ポピュラー文化からみたその実態』勁草書房: 219-46.
- 辻泉, 2013, 「雑誌に描かれた「男らしさ」の変容」『人文学報 社会学 48』首都大学東京人文科学研究科, 467: 27-66.
- 辻泉, 2014, 「なぜ鉄道オタク—「想像力」の社会史」宮台真司監修, 辻泉・岡部大介・伊藤瑞子編, 『オタク的想像力のリミット—〈歴史・空間・交流〉から問う』筑摩書房: 63-95.
- 辻泉, 2015, 「遊ぶ—男らしさの快樂とそのゆくえ」伊藤公雄・牟田和恵編『ジェンダーで学ぶ社会学 [全訂新版]』世界思想社: 148-160.
- 内田雅克, 2010, 『大日本帝国の「少年」と「男性性」—少年少女雑誌に見る「ウィークネス・フォビア」』明石書店.
- 宇田正, 2007, 『鉄道日本文化史考』思文閣出版.
- 上田龍史, 1988a, 「日本鉄道模型小史 (1)」『鉄道模型趣味』機芸出版社 498: 74-80.
- 上田龍史, 1988b, 「日本鉄道模型小史 (2)」『鉄道模型趣味』機芸出版社 499: 64-71.
- 上田龍史, 1988c, 「日本鉄道模型小史 (3)」『鉄道模型趣味』機芸出版社 500: 84-89.
- 上田龍史, 1988d, 「日本鉄道模型小史 (4)」『鉄道模型趣味』機芸出版社 501: 68-73.
- 上田龍史, 1988e, 「日本鉄道模型小史 (5)」『鉄道模型趣味』機芸出版社 502: 76-80.
- 上田龍史, 1988f, 「日本鉄道模型小史 (6)」『鉄道模型趣味』機芸出版社 504: 88-92.
- 山北藤一郎, 1930 = 2003, 『復刻版 少年技師ハンドブック 電気機関車の作り方』誠文堂新光社.
- 山中恒・山本明編, 1985, 『勝ち抜く僕ら小国民—少年軍事愛国小説の世界』世界思想社.
- 山崎明子 2005『近代日本の「手芸」とジェンダー』世織書房.
- 横田順彌編, 1986, 『少年小説大系第8巻 空想科学小説集』三一書房.

※本論文は, 2015 ~ 2018 年度科学研究費基盤研究 (c) JP15K01927 「近代日本の手作りとジェンダー—大量生産の時代における趣味のジェンダー化—」(研究代表者: 神野由紀 関東学院大学教授) および, 2015 ~ 2017 年度科学研究費特別研究員奨励費 JP15J10977 「変容する趣味空間と力学の研究—鉄道に焦点を当てて」(研究代表者: 塩谷昌之 東京大学大学院 博士後期課程) による研究成果の一部である。

